

第8章 平成・令和の豪雨災害当日の防災・減災対策・避難体制の検証

今後も、大規模な水害の発生が想定される状況において、平成・令和の豪雨災害時における防災・減災対応の経過を記録・検証することは、再び豪雨災害に見舞われた際の対策として、非常に有益である。

そこで、災害発生日の防災・減災対応の経過を、当時の記憶や写真データ、日記・メモ等を基に、可能な限り記載する。

ただし、災害当日は、防災・減災対応に追われ、正確な記録がほとんど残っていない。そのため、従前の防災・減災対応指針や当時の記憶に基づいた記載となる。

第1節 従前の防災・減災対策・避難体制

昭和50年8月6日の水害以降、庭月観音では床上浸水に対する防災・減災対策を実施してきた。その概要は、下記のとおりである。

第1 常時点検事項（事前準備）

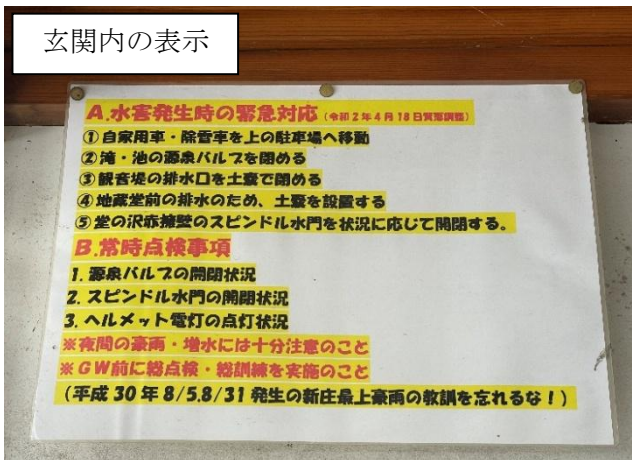
	項目	内容
1	防災・減災対策備品の事前準備	豪雨の際は、防災・減災対策のため作業を実施する。そのための作業着・ヘルメット・ヘッドライト・カッパ・長靴、軍手等を準備する。
2	湧水バルブの確認	豪雨の際は、境内に流入する湧水が、弥吉沢擁壁スピントルの閉鎖により、境内に堆積する。 その防止のために、湧水バルブを閉鎖する必要があるため、バルブの稼働・開閉状況を確認する。
3	弥吉沢（堂の沢）擁壁スピントルの確認	豪雨の際は、弥吉沢の沢水が、増水により境内へ逆流する。その防止のために、弥吉沢擁壁のスピントルを閉鎖する必要があるため、スピントルの稼働・開閉状況を確認する。
4	観音堤・地藏堂前の流入防止対策の確認	豪雨の際は、雨水が観音堤及び地藏堂前から境内に流入する。その防止のため、土嚢やコンパネ等により、流入防止対策を実施する。

第2 水害発生時の対応（当日の防災・減災対応）

No	項目	内容
1	気象情報の収集	TV・インターネット等を活用し、気象情報を収集する。その情報を基に、今後の対策を検討する。
2	車両の移動	境内浸水が想定される場合は、自家用車・除雪車を、境内から観音寺橋脇駐車場へ移動する。これにより、浸水による車両の損害を防止する。
3	寺院内備品等の避難	寺院内備品等の避難を開始する。
4	湧水バルブの閉鎖	弥吉沢の増水に伴い、境内への湧水の堆積を防ぐため、湧水バルブを閉鎖する。
5	観音堤・地藏堂前の雨水流入対策の実施	弥吉沢の増水に伴い、雨水の流入防止対策を実施し、境内への堆積を防ぐ

6	弥吉沢(堂の沢)擁壁 スピンドルの閉鎖	弥吉沢の増水による沢水の逆流が開始した場合は、逆流防止のため弥吉沢擁壁スピンドルを閉鎖する。
---	------------------------	--

玄関内の表示



スピンドル



源泉バルブ写真 後日追加予定



地藏堂前 止水対策



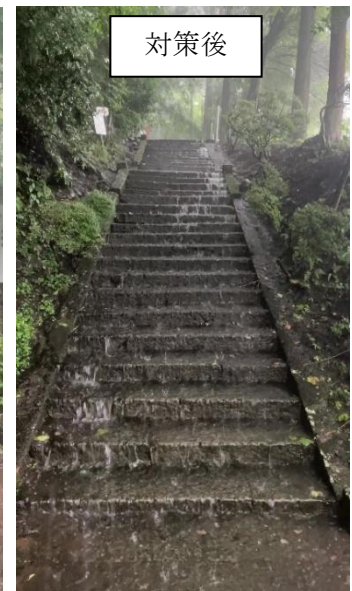
- : 湧水バルブ箇所
- : スピンドル箇所
- : 観音堤止水箇所
- : 地藏堂前止水箇所



対策前



対策後



第2節 従前の防災・減災対策・避難体制に対する成果・課題・今後の方針

第1 防災・減災対策備品・作業着等の事前準備

1 これまでの対応と成果

経験則から、防災・減災対策用の備品については、ある程度は、事前準備していた。これにより、一定の効果を上げることはできた。

2 課題

平成・令和の豪雨発生当日に、防災・減災対策作業を実施するにあたり、下記のような問題が発生した。

(1) 作業着着用の徹底不足

どの段階で、作業着を着用して作業するかを、徹底していなかった。

(2) 防災・減災用備品・作業着の保管場所が点在

防災・減災対策備品が、寺院内の各所に点在していた。そのため、探すのに時間が掛かり、作業の遅延が発生した。

(3) 防災・減災対策備品・作業着の品目・数量が不足

防災・減災対策備品の品目・数量を、事前に確認していなかった。そのため、数量が不足していた。

3 上記の諸課題・問題の具体例

(1) 防災・減災対応時の初動の服装

豪雨が発生した場合、庭月観音では最初に下記の2点に対応する。

① 境内浸水に備え、自家用車を観音寺橋脇の駐車場に移動する。

② 床上浸水に備え、寺院内の備品を高所に避難させる。

これまでの経験から、「①自家用車の移動」が必要な規模の豪雨は年2～3回程度、「②寺院内備品の移動」が必要な規模の豪雨は、年1～2回程度発生していた。それらの多くは、幸いにも「取り越し苦労」に終わることが多かったため、寺族の心に「油断」・「慢心」が発生していた。

平成・令和の豪雨災害は、前例の無い降雨量であり、鮭川・弥吉沢の水位は、急激に上昇した。寺族一同、大慌てで自家用車を移動後、寺院内（室内）で備品の避難を開始した。その時点で作業着を着用し、長靴・胴長などで屋外作業用具を実施すべきであったが、大混乱の作業の中で失念してしまった。

特に、令和6年梅雨前線豪雨災害では、寺院内（屋内）での備品避難作業を普段着・裸足で実施していた。その最中に床上浸水となり、長靴・作業着等などの物品は浸水・流出により使用不可能な状態となった。

そして、普段着のまま、最上広域消防のボートにより救出され、観音寺公民館へ避難することとなった。

これが、その後の復旧作業に大きな影響を及ぼすことになった。

(2) 作業着等の不備による感染症の罹患

避難時における物資・備品等を設定していなかったことは、その後、全てに

おいて悪影響をもたらした。

一般的に、水害の避難の際は、下記の物品を事前に準備することが必要とされている

No	項目	詳細
1	食料・水	ご飯、レトル食品、ビスケット、チョコ、乾パン (最低3日分)
2	衣類 下着・靴	シャツ・パンツ・ジャージ・靴下・靴
3	洗面用具	洗面用具・歯ブラシ・歯磨き粉・タオル
4	筆記用具	ペン・ノート
5	雨具等	レインウェア・傘
6	小型家電	懐中電灯・携帯ラジオ・予備電池・携帯充電器
7	救急 衛生用品	ばんそうこう・包帯・消毒液・常備薬・マスク・消毒液・石鹸・ウェットティッシュ
8	防寒具	使い捨てカイロ・ブランケット
9	作業着類	防災用ヘルメット・作業着・軍手・長靴・作業靴
10	貴重品	通帳・現金・パスポート・運転免許証・病院診察券・マイナンバーカード
11	その他	子ども・女性・高齢者用品等

首相官邸 HP を参考

上記の物品を、防災バックとして事前に取り
まとめて準備していなかった。

そのため、避難後に多くの物品が不足し、その度に、買い出しに行くことになった。

また、食糧・水等については、ご信者及び親戚から多大なるご支援をいただいた。深く感謝・厚く御礼申し上げる。

また、作業着や長靴等が不備のまま、復旧作業を開始したのは、事前の準備不足であり、未熟であったと言わざるを得ない。

副住職は、避難の際に長靴・靴を持ち出せず裸足のまま避難した。履物は、たまたま自家用車内にあったサンダル 1 足しかなく、被災から2日間程度は、サンダルで泥だけの境内を移動し、復旧作業を実施していた。その後、作業着と長靴は、新庄まで買い出しに行き、購入した。

しかし、時すでに遅く、数日後には 38.7℃の高熱を発症。県立新庄病院地域救急センターを診療した結果、感染症に罹患していることが判明し、抗生物質を点滴することとなった。

感染症の発症時の様子



4 今後の方針

- (1) 防災・減災対策の初期段階からの作業着・胴長等着用の徹底
- (2) 防災・減災用備品のリスト化及び保管場所を設定しておく
- (3) 避難用物資・備品のリスト化及び保管場所を設定しておく

第2 情報収集による災害規模の想定と初動体制の構築

1 これまでの対応と成果

防災・減災対応については、事前の情報収集と初動体制が重要であることから、様々なメディアを活用し、豪雨災害の規模を予測していた。それにより、最低限の初動体制を構築することができた。

2 課題

- (1) 収集すべき情報内容の未設定
- (2) 情報源となるメディア（媒体）の未指定
- (3) 収集した気象情報の分析・活用方法の未設定
- (4) 気象情報の分析結果に基づく「想定すべき災害規模」の未設定
- (5) 「想定すべき災害規模」に基づく「初動対応レベル」の未設定

3 上記の諸課題・問題の具体例

(1) 大量の情報による混乱

情報源となるメディアが多種多様にあるうえに、どの媒体から入手した情報を最優先し活用すべきか、検証していなかった。そのため、大量の情報に振り回されてしまい、判断が遅れてしまった。

(2) 経験則に基づく曖昧な判断と対応

収集した気象情報の分析・活用方法を確立していなかった。それにより、想定される災害規模も経験則に基づき判断してしまった。

これにより、防災・減災対策の開始時間が遅れるだけでなく、災害規模に見合った適切な対応ができなかった。

(3) 寺族内での意見の対立

情報源及び優先度、情報分析及び災害規模に見合った初動体制を構築していなかったことで、その都度、寺族内で話し合い、意見が対立してしまった。これにより、対応が遅れるだけでなく、適切な対応方針を打ち出せなかった。

4 今後の方針

(1) 収集すべき情報内容の精査

収集すべき情報内容について、下記の項目を精査し、設定していく。

- (一) 最上管内の特別警報・土砂災害警戒情報・警報・注意報・早期注意情報の発令状況
- (二) 最上管内の降水量・降水予報
- (三) 鮭川・金山川・真室川水系の水位

(2) 情報源となるメディアと優先度の設定

下記の情報源を精査し、情報の取得方法や優先順位を決定していく。

- (一) TV 等の気象情報・天気予報
- (二) 山形地方気象台、山形県河川・砂防情報システム HP 等
- (三) Tenki.jp(一財日本気象協会)、ききくる(気象庁)等のスマホアプリ
- (四) 市町村防災行政無線による情報

(3) 収集した気情報の分析・活用方法の設定

収集した気象情報について、下記の通り分析・活用を検討していく。

- (一) 10 分間降水量からの 1 時間降水量を想定
- (二) 過去の豪雨災害時の鮭川・金山川・真室川水系上流の降水量との比較による水位上昇量及び開始時間の設定
- (三) 上記の気象情報の分析結果に基づく「想定すべき災害規模」の設定
- (四) 「想定すべき災害規模」に基づく「初動対応レベル」の設定

第 3 寺院内物品の避難先等の未設定

1 これまでの対応と成果

寺族一同で、寺院の寺宝・仏具、備品・物品(物品等)の避難し、ある程度の減災対応はできた。

2 課題

- (1) 1 階に設置すべき物品の未精査
- (2) 想定される災害規模に応じた物品等の移動範囲が未設定
- (3) 想定される災害規模に応じた物品等の移動先が未指定

3 上記の諸課題・問題の具体例

- (1) 1 階に物品が大量に保管

1 階に設置している物品が大量にあるため、避難作業に時間が掛かった。普段から、1 階にはなるべく備品を置かず、2 階に置けるものは、2 階に置くべきである。

- (2) 二度手間・三度手間の移動

想定される災害規模に応じた物品等の移動範囲・移動先を指定していなかったため、一度移動させた物品を別の箇所に移動することが多く、二度手間・三度手間が発生した。そのため、大幅な時間の損失となった。

- (3) 寺族内の意見の対立

寺族内で移動場所・移動範囲について意見が対立したため、大幅な時間の損失となった。また、移動が間に合わず被災した物品も多かった。

4 今後の方針

- (1) 1 階に設置すべき物品の精査
- (2) 想定される災害規模に応じた物品等の移動範囲の設定
- (3) 想定される災害規模に応じた物品等の移動先の設定

第4 緊急避難体制の未設定

1 これまでの対応と成果

平成 30 年の最上豪雨においては、床上浸水により寺族一同は寺院内に残り残され、2 階で一夜を明かすこととなった。

令和 6 年の梅雨善前線豪雨災害においても、床上浸水により寺族・信徒が寺院内に残り残され、最上広域消防にボートで救助いただくこととなった。

2 課題

- (1) 避難判断基準の未設定
- (2) 避難ルート及び避難手段の未設定
- (3) 避難用物資・備品の未設定

3 上記の諸課題・問題の具体例

(1) 人命の危機

避難判断基準（どの時点で防災・減災対応を辞めて避難するか）を未設定であったため、避難の時期を逃してしまった。その結果、寺族及びご信者の命を危険に晒してしまった。

(2) 避難先での不便

避難用物資・備品を一か所に設置しておらず、避難の際に持ち出すことができなかった物品が多数あった。避難先での不便を強いられた。

(3) 迅速且つ衛生的な復旧作業の阻害

作業着等の備品を持ち出せなかったため、その後の迅速且つ衛生的な復旧作業が出来なかった。

4 今後の方針

- (1) 避難判断基準の設定
- (2) 避難ルート及び避難手段の設定
- (3) 避難用物資・備品の設定

第5 今後の方針

上記の課題は、全て事前の準備不足が原因であろう。事前に適切な対応を検討し、状況把握に努め対処すれば、ある程度、被害を軽減できたと思われる。

今後は、事前準備、対応基準、初動体制・緊急避難等のマニュアル化を実施する必要がある。